

C・W・ニコル

長野県黒姫

Every day is EARTHDAY.

アースデイ東京2008大会委員長のニコルさんが会場を歩くと、みんな笑顔であいさつする。
ニコルさんの持っているパワーがアースデイを明るくしている。



世界は1・6％で動き出す

みんなの意識が変われば、日本の森は変わる。日本が変わる。
森の再生を目指して今日も明日もアースデイ。



ボクたちの森は

「いろどり」であふれている。

日本の森は美しい。

毎日をアースデイに

「ボクはクマなんです。人前に出るのは苦手。できれば静かに森にいたいんです」

二〇〇八年四月十九日。「Shift Green」をスローガンにアースデイ東京二〇〇八イベントが開幕した。その前日、大会委員長のC・W・ニコルさんに森について、自然に付いて、これからの日本についてインタビューをした。

「アースデイはイベントです。楽しく過ごすことが目的なので、むしろかじことは考えなくてもいい。家族で、仲間に参加して、楽しい時間をすごしてくればそれでいい。というのも、アースデイに来た人ならだれでも、少しは地球のこと、自然のこと、環境のことを意識してくれると思います。それを家に持って帰ってくれば、彼らにとっては毎日がアースデイになる。

ボクは人ごみにいられないんです。ボクは耳がいいので（四五歳までは、

コウモリの羽音が聞こえました）、いろんな音が聞こえると頭が痛くなるし、人見知りだから大勢の人が集まるところにはなるべく近づかないようにしています。だから野球場やサッカースタジアムに行ったこともないし、ロックコンサートのようなところにも行かない。アースデイのときくらいです。もし大会委員長をやっていないくて、初日のスピーチをしなくてすむんだったら、ずっと山にいたいくらいです（笑）」

日本が好きだから

「はじめて日本に来た一九六二年、日本には豊かな森がありました。それからしばらく日本を離れていました。そして、再び日本にやってきました。ここで暮らそうと決めたのが一九七八年のことでした。

それから高度経済成長やバブルの波に乗って、めざましく発展していく。すべてが右肩上がりのときに、陰で犠牲となっていたのが森でした。何百年も生きてきた大木、いろいろ

ろな動物や植物、昆虫たちが多様性豊かに住み着いていた原生林は今では日本の森全体の二％以下になっていました」

森の仲間ウエルズ

昔のウエルズと同じことが日本に起きていた。

ローマ帝国時代の記録によると、ウエルズは約九〇％が森だった。しかし、ナポレオンとの戦争や鉄道の枕木など、木を切りつづけた結果、ニコルさんが生まれた一九四〇年に

はウエルズの森は国の面積の五％しか残っていなかった。そしてその小さな森は貴族や金持ちの猟場として残されていたに過ぎない。

荒れ放題だったウエルズの森。しかし森の再生活動が続けていくうちに、国土のたった五％しかなかった森が今では六〇％にまで戻ってきました。

「このままではいけないと、なんとかしないといけない。それもウエルズにできたことが、日本にできないはずはないと」

やるしかない

「口で言うよりも、やる。昔から日本にある言葉にしたがって、ボクもやることに決めました」

こうして二〇年以上前、荒れた森を自分で購入し、森の再生に取り組み始めた。

「ボクたちの森はどんどんぎやかになってきました。以前は『幽霊森』呼ばれていたほど暗くて、恐ろしい森だったのに、手入れをしたことで光が降りこみ、たくさんの若木がでて、鳥が巣を作るようになりました。いまではにぎやかで明るい森になったのです。

ボクたちの森は「いろどり」であふれています。本来、日本の森は美しい色彩を持っているのです。紅葉の季節になるとほんとうにため息が

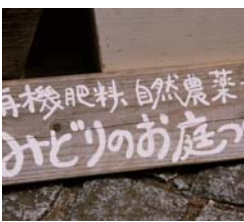


好奇心旺盛な少年の表情

ニコルさんはさまざまな顔を持っている



バイオディーゼル燃料を利用した「エネルギーアクション」。
会場内の発電を100%自然エネルギーでまかなっている。



アースデイ東京

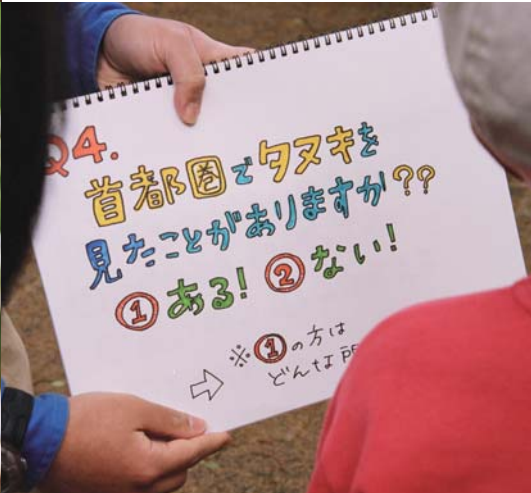
Earth Day Tokyo

1970年、環境問題に関心をもってもらおうと全米へ呼びかけ、地球への関心を表現するユニークで多彩なイベントがはじまった。日本では1990年からアースデイの活動が次第に広がった。今の形でアースデイ東京が運営されるようになったのは2001年から。





少々ロマンチックかもしれないが、私は永続的で深い友情が結ばれるのには、その時の事情や偶然以上の何かもっと強いものがひそんでいるように思う。何か遠くにある共通の目標を達成するために、我々の人生の旅路が落ち合うのではないか。そうして人と人との間に強い絆が結ばれることになるのではないか。そんな気がするのである。
(著書『私のニッポン武者修行』から)



SHIFT GREEN

アースデイ東京には自然の恵みと人びとの笑顔が集まる

大木がなければ鳥は巣をつくれぬ。
森であるためには
「うろ」があるような大木がいる。

出るくらい美しいです」

ニコルさんの考える原生林にはまず、大木がある。そこで生きている生命は、食物連鎖のルールが働いて、きれいな三角形を作っている。そして食物連鎖の頂点にはクマがいる。

そこで、まずは大木が育つための環境をつくることにした。はじめに、荒れた森の九〇％を思い切って間引いた。そうすると、ヤゴ、サンショウウオ、ニレ、シラカバなどが生き生きと顔を出しはじめたのである。

生き物が森にやってくるのと、住むのとは大きく異なる。動物たちにとって住居となるような森、habitatになるようにしなければ森が再生したとは言えない。

多様性は可能性

地球温暖化の嫌な話をいっぱい聞きます。ボクたちはそれと面と向かって戦わなければならない。ミズナラという木に、いままではいいな



かった昆虫がついています。その昆虫はミズナラに穴を開けてカビを持ってきて、枯らせてしまう。

でも、ボクたちの森だけでも一三七種類の木があります。日本の自然には多様性があります。多様性があるということは、対応性があるということです。生き残る可能性があるのです。

ボクたちのやるべきことは、自然

の多様性を上手に利用することです。人間が荒らした森は、人間の手と愛情で元に戻すことができます、ボクは信じています」

原生林はDNAの宝庫と言われる。アマゾンにビッグミーマーモセットという動物が住んでいる。体重約一二〇グラム、体長約一四センチと、サル類の中で最も小さいが、ほかのどのサルもまねのできない知恵をもつ

ている。たとえば、主食の樹液は、木に穴を開けてもすぐには染み出してこないことを知っていて、翌日まで溜まるのを待つて食べる。未来の収穫を意識して行動するサルは人間のほかは確認されていない。いい森とはこういう珍しい動物や植物が住んでいる森なのだ。

人の手を入れるということ

森の回復は自然に任せておけばいい、という人は多いのではないかと。原生林に人の手を入れないほうがいい、と。

「ボクはそれだけでは足りないと思う。森を荒らしてしまったのは人間。それなのに、放っておけばそのうち元に戻るだろうなんて、無責任にもほごがある。壊してしまったものは、放っておいても元に戻らない。当たり前のことです」

美しい森を残すだけではなく、荒れてしまった森をもう一度生き返らせるための努力を人間がしなければいけない。なにもしないのが一番いいというのは、森が再生した後のことだ。

「アフアンの森では、まずはじめに人間の手の力というものがあつて、その上に科学技術を利用して効率的に調査、研究をしています。今は、自然はどの程度まで人間を受け入れるのかを見定めようとしています」。

森に入る人間をどの程度増やしたら、クマはやってこなくなるのか、鳥が巣を作れなくなるのか、珍しい植物が踏まれてしまうのか。しかし、調査してみると動物は逃げていませんでした。アフアンの森にやってくる人に悪い人がいないのかもしれない（笑）

恥を知れ

「自然には多様性が必要なのです。ですから、木を植えるときは混合林になるように、いろいろな種類の苗木を植えるようにしています。今の日本の山は国のものか、地元のお金持ちのものです。森が荒れているというのは、自分の家の庭が荒れているのと同じ。そんな庭じゃあ恥ずかしいでしょ。もっと自分の庭を手入れして、誇りを持てるようなものにしてほしい。日本人は昔からこういう言葉を知ってい『恥を知れ』と」

森が回復するには人間がセッティングしてやる必要がある。ただし、スギだけを植える、ヒノキだけを植える、ということではない。

「できる人はやらなければいけないと思います。やりたくてもできない人とは根本的に違う。もっと責任を果たさなきゃいけない。あるべき姿、あるべき行動をみんながそれぞれしていけば、必ずうまくいく」

ボクはクマなんですよ。
人がいっぱいいるところは苦手。



C・W・ニコル
レー・だぶりゅ・にこる

作家。財団法人C・W・ニコルアフアンの森財団理事長。1940年、英国南ウェールズ生まれ。17歳でカナダへ渡り、カナダ水産調査局北極生物研究所の技官として海洋哺乳類の調査研究にあたる。1995年、日本国籍を取得。2002年からは居所の長野県黒姫で荒れた里山を購入。「アフアンの森」と名付け、生態系の再生活動を続けている。

氷の文化が消えるとき

北極の水がとけている。十七歳のときに北極に滞在して以来、ニコルさんが北極に持っている想いは尽きない。

「北極の水がとけて、一番最初になくなるのはワモンアザラシでしょう。ワモンアザラシは氷の上に巣をつくるから、氷がなくなると子どもが生まれなくなる。ワモンアザラシがいなくなるとことは、地球から氷の文化がなくなるときなのです。その次にいなくなるのがホッキョクグマ。主食のワモンアザラシがいなくなるし、ホッキョクグマも氷がない時期はえさを食べないのだから、真つ白な世界だともおもわれている北極にもみどりがあるんですよ。いや、みどりであふれているといったほうがいい。春になると分厚い氷の下に藻の一種の珪藻が

びっしりくつついていいます。それを、氷の下に潜って見上げると、みどりがキラキラと光ってそれはもうほんとうにきれいです。みどりってほんとにすぐきれいなんです」

意識するだけでいい

地球環境がここまでできてしまった現状を、私たちが急い方向へ変えることは難しい。しかし、このまま悪い方向へ進んでいくことだけは防がなくてはならない。私たちにできることはあるのだろうか。

「ボクはみなさんに、いっしょに森づくりをしてくれと言いたいわけではありません。しかし、森を意識してほしい。みんなの意識が変われば、日本の森は変わる。日本が変わるのです」

一・六％で世界が変わる

「You can make it change. これはボクが好き言葉です。知り合いの科学者がこんなことを言っていました。生物の細胞レベルでは、全体が変化して新しいカタチになるきっかけは、細胞全体の一・六％の変化なのだと。だからボクたちの考えに賛同してくれる人たちを少しでも増やしていきたい。アースデイには例年十二万人ほどが参加します。日本の人口の約〇・一％です。これが将来二〇〇万人規模になれば日本も変わります。そこでやっていきたい」

インタビューの翌日、心配された天気もなんとか持ちこたえた。アースデイ東京のイベントは十九日、二〇日の二日間。アースデイそのものは二二日が本番だ。

今は年に三日しかないが、いつか毎日がアースデイになるその日まで、ニコルさんとアフアンの森の活動は続く。



新刊紹介

『マザーツリー 母なる樹の物語』 静山社
C・W・ニコル著 片岡鶴太郎イラスト